

NEWS LETTER

甲南大学 ビジネス・イノベーション研究所

日本における産学連携とTLO（技術移転機関）

甲南大学ビジネス・イノベーション研究所兼任研究員（甲南大学経営学部教授） M.L. シュレスト

1. 日本におけるTLO（技術移転機関）

日本でも産学連携がイノベーションの新たな推進力として評価されて久しい。日本経済、そして、大学自身を取り巻く環境が変化中、大学には新産業の核となる技術の創出とその移転という、第3の新たな役割が課せられ、その役割もほぼ定着を見たといえる。このような日本の産学連携の促進の背景には、米国における産学連携が経済再生に及ぼした影響への評価があったことは言うまでもないが、米国をモデルとして、日本には産学連携を後押しするTLO（技術移転機関）が生まれ、その数は、各都道府県にほぼ一つの割合にまで達している。そして、自前で、TLOを設立することができない中堅、小規模な大学であっても、他大学と連携しながら、地方自治体の後押しもあって、各地域のTLOに組みしていく、という「日本的」な構造が確立した。

しかしながら、元来「萌芽的」とされる大学の基礎研究が、直ぐに莫大な収益に直結するはずもなく、公的資金の投入によってのみ、多くのTLOは存続するという事態に陥った。そして、平成23年の経済産業省「補助金・委託費計画」によると、平成24年度までの達成を目指す項目として、全国のTLO46機関（平成22年7月現在）を半数の23機関にする、と明記されている。これから、多くのTLOが、再編、統合、場合によっては閉鎖を余儀なくされることとなるであろう。

2. TLOをめぐる諸問題

しかしながら、日本におけるTLO乱立や大学の産学連携のあり方には当初から多くの課題が指摘されていた。筆者自身も、2000年から5年間程、名城大学コピーマート名城研究所及び（財）国際高等研究所の研究プロジェクト（特許庁委託事業「大学における知的財産権研究プロジェクト」研究代表者 北川善太郎京都大学名誉教授）に参加し、このような過渡期にある大学における技術移転の実情と課題の調査に加わった。しかし、そもそも、米国において成功物語として語られることの多いTLOも、現実には、TLOが扱う特許のうち、民間にうまく移転されて収益に繋がるものは、ごくごく限られた数でしかないという現状は既に把握していたため、そのことを機会がある毎に報告していたつもりである。そして、当然、特許出願や維持費に経費がかかるうえに、具体的なロイヤリティ収入を得るまでに時間がかかることから、政府からの助成期間が切れると行き詰まるTLOが出てくることも当初から予測できていた。具体的にロイヤリティ収入を得るまでの資金をいかに確保するのか、また、資金が十分でない中、質の高い技術移転の専門家（知的財産の専門家）、法務、財務の専門家の確保をどう進めていくのか等の問題は深刻である。

一方で、企業の「下請け化」、「利益相反の危険性」も懸念された。確かに、産学連携は大学にとっても、また、産業界にとっても重要であり、TLOを通しての技術移転の促進も好ましいことである。しかし、徹底した議論を欠いた状態で、米国型の移転モデルが至上目標として掲げられ、それに猛進すべく、日本が動きだしたこと、前途多難のままのスタートを切ったことはやはり後悔せざるを得ないだろう。

作るだけ作られ、今度は軒並み閉鎖、再編に追いやられるTLO。一時でも、存在したことに意義があるというのであれば、意義はあったのかもしれないが、当初から予想されていたことだけに、何とも悲しい顛末である。

これからが、日本のTLO、そして技術移転の在り方において、本当の真価が問われる時代になるだろう。すなわち、各地域、各大学で独自の優位性、多様性を活かして、独自の産学連携モデルを構築しなければならない時代の到来である。

2011
vol. 26

甲南大学ビジネス・イノベーション研究所シンポジウム抄録

「甲南の三賢人による現代社会への提言

—我々は科学・技術という文明と、どのように向き合うべきか—

日 時：平成23年11月3日（祝・木）14：00—17：30
場 所：甲南大学甲友会館 大ホール
問題提起：甲南大学 ビジネス・イノベーション研究所長 西村 順二氏
講演者：甲南大学 特別客員教授 佐藤 文隆 氏
 甲南大学 特別客員教授 藤田 昌久 氏
 甲南大学 特別客員教授 加護野忠男 氏
パネラー：甲南大学 学長 高阪 薫 氏
コーディネーター：甲南大学 学長補佐 井野瀬久美恵 氏

*この抄録は、講演を主としたものです。パネルディスカッションについては上記4名で行われましたが、紙幅の都合上、高阪薫学長のお話だけを掲載してあります。ご容赦下さい。

開会の辞・趣旨説明

甲南大学ビジネス・イノベーション研究所長 西村 順二 氏

現代社会では、産学にとどまらずに、民産官学という、非常に大きな枠組みで考えないと、社会の問題、経済の問題、地域の問題は解決できなくなってきております。そういう中で、残念ながら3.11という大きな震災が訪れました。日本中が絆を考え、復興に向けてできることは何かを考えました。甲南大学も、知的拠点として何か情報発信をしなければいけないという思いから、甲南の三賢人であられ、学界だけではなく、社会に対して大きな発言力を持っておられる三人の先生方に御登壇いただきまして、このお三方が考える日本の未来はどうあるべきかをお話いただきたいと存じます。例えば、自然の驚異である津波に対して、我々は逃げるしかないのかどうなのか。逃げるのも一つの英知、知恵です。あるいはそれに向かって、次は、そういうことに負けない地域づくりをしていくというのも英知、知恵だと思えます。我々が、綿々と追求してきた科学、文明、そして技術、これらをもう一度、考え直して、自然の恐ろしさに敬意を表しながら、しかし自然とどう向き合うべきか。それを皆さんと考えていく良い機会になればと存じます。それでは三賢人の先生方のお話をきかせていただきます。



「“極端な時代”：原子力の時代を生きて」

甲南大学特別客員教授 佐藤 文隆 氏

御紹介いただきました佐藤です。私のお話は、いわば、現在を遠望したというか、遠くから時代を見るということで、今、めまぐるしく変わる日々の状況、特に原発事故に触れるというよりは、20世紀という時代から遠望したいと思う。そういう、自分が生きてきた時代からの実感を込めてお話をしたいと思えます。

“極端な時代”。好きな言葉ですが、英語で、Age of Extremeと言い、Extremeが「極端な」という意味です。20世紀、第1次世界大戦から冷戦崩壊までの期間、この時代を「極端な時代」という。ちょうど、私が生きてきた時代の実感であります。私には、原子力という言葉は、どちらかと言うと、むしろ核兵器の意味になるのですが、それはまさしくアインシュタインの世紀でもあるのです。私はアインシュタインの物理を使って、宇宙を探求するというようなことをずっとやってきましたが、さらにアインシュタインという人間自体にも非常に凝っていきまして、アインシュタインを物理学だけではなくて社会で考えることをやっています。1960年代あたりまでのいろんな国の切手などに表現されたアインシュタインは、全部、原子力の父です。あるいは、原子力とか、ロケットとか、要するに力強い科学技術の象徴がアインシュタインだったのです。

現在、アインシュタインと聞くと、宇宙とか統一理論とかを思い浮かべる人が多いと思うのですが、彼が死んだ時の追悼文なども「核時代の父、逝く」というものでした。原子力だからアインシュタインは偉いのだと。1950年代までは全部そうでした。核の時代の象徴としてのアインシュタインだったのです。

勿論「宇宙のアインシュタイン」と言うのも事実です。しかし、それも、核からの宇宙物理、核からのブラックホールとビッグバン、なんですね。このブラックホールというのは、オッペンハイマーという人が1939年に書いた論文で提起されました。彼は、アメリカの最初の原爆、広島・長崎の原爆製造を実質的に指導した人物ですね。彼は、ロスアラモスに赴く前はUCバークレーの教授だったが、自ら志願して、指導者として、行くわけです。その直前に書いた論文がブラックホールについての1939年の論文であり、また、1935年に提出された湯川理論を発展させて世界に広報する役目を果たしたような学者です。そういう学者が原爆をつくるのです。このオッペンハイマーは、アメリカへ亡命していたアインシュタインと戦後は非常に親しい関係になります。

それから、ビッグバンというのは、1946年ぐらいに、ガモフが、宇宙の初期は火の玉のようで、周期律表にあるいろいろな元素はそういう時期に作られたのだという説から、進展してきた学説です。ガモフは、ロシア革命後のソ連からアメリカへの亡命者です。当時、彼は、核開発なんかに、ある意味で一番に向いていたのだが、亡命者ということで、原爆開発に入れてもらえなかった。戦後になって、原爆は陸軍がつくったので、海軍は挽回とばかりに、水爆に一生懸命になるのですが、このガモフも、海軍の方へ売り込んで、水爆開発の初期に一役を果たすのです。皆さん、こういう話を聞いても、全然、理解できませんよね。現在では、原爆をつくったり、水爆をつくったりする人と、ビッグバンとか、素粒子の統一理論とかいう人は、全然、違う世界の人ですよ。しかし原子力黎明期の欧米の学問の世界では全く一緒だったのです。これが、原子の世界、核の世界を解明した物理学や化学の成果が、間を置かず、なだれ込んだ「原子力」というもののオーラを造ったのです。文化的にもものすごく強力なものだったのです。

中村雄二郎という哲学者は、科学者を研究や開発に突き動かすのはリビドーだろうとして、原爆もきっと科学者はおもしろいから一生懸命に熱中したのだと、言っている。リビドーとは、フロイトがいう生の本能のようなエネルギーの元で、物事に熱中するとか、異性とのお愛に落ちるとか、そういうものですが、そういう情熱の盛り上がりみたいなことが原爆創造にもあったはずだと、中村は考える。しかし、お国のためにいやいや造らされたみたいに書かれている。ところが、佐藤文隆だけが、「原爆はすごい！という感銘のようなものが、自分を物理学に導いた原体験ではなかったか」と告白しているのは大変正直である、と論じている。実際、子供期から青年期、原子力というものは、何て言うか、魔法のような存在、というのが、私の実感だったと思います。

2番目の話に移りますが、この放射線の害、こういう話は、いま毎日聞きますよね。大体、年間、100mSv以上だと障害が確実に起こるが、それ以下でも無害ではないと。そういう低線量では、同じ量を浴びても、ある人には悪影響が現れるし、ある人には現れない。リスクの因果関係が確率的にしか言えないというわけですね。また、人によっても、またその後の生活経過によっても、随分違うわけですね。癌になる諸々の要因の一つとして放射線があるのだから、これだけ取り出して云々するのは難しいから確率になる。しかし、確率というのは人々に安心を保障せず、不安を掻き立てるだけです。

確かにごちゃごちゃした身体や生活の世界では、事態が複雑で完全には把握できないから、確率的にしか言えないが、原子とか素粒子の単純な世界では、物理学の理論で物事をきちんと捉えている、と思うかもしれませんが。ちゃんと方程式に従って確定的に物事が粛々と進行していると。ところが、20世紀前半に見出された量子力学という物理学の理論によると、どうも一番根底のところ、物事は確率的らしいということになっています。単に、情報が不足しているから確率的なのではなく、もともと決まっていない。それが物質の世界であるというのがわかったのです。ところが、アインシュタインは、「神様はさいころを振らない」と言って、死ぬまでこれに反対していたのです。20世紀後半のハイテク、バイオ、宇宙や物質の究極、などで大活躍した物理学の基礎にある量子力学に、あの物理学の神様アインシュタインが反対していたのです。物事をシンプルにすれば、そこではちゃんと因果的に動くというわけではないことになった。こういう、ものの見方の大変換というのは、私は別に、自然科学だけじゃなくて、他の領域でも根底で起こっていることだと思っています。

根底に戻って言えば、本当は因果的なのか？もともと因果的でないのをおある意味で丸めて見るから因果的に見えるのか？こういう問題は、我々が法則を求める理由は何だっけ？という地点に立ち返らせます。それは、近代では、「知は力である」です。これは、神に頼らずに、知識を獲得して、人間は自分の力で生きていくのだということですね。私はよく、「人類というのは、けなげだ」と言ってます。「けなげな人類」というのは、私の大好きな言葉の一つです。だれかから権威を与えられたわけでもないのに、けなげに自分で、手づくりで、いろいろやっている。神様まで自分でつくって、それで世の中を治めることもやってきた。もちろん、この流れが、科学技術や社会を合理的なシステムにしていく試みとして持続中なわけですね。この近代では、実際にどうかは別にして、人間はみんな自立していて、自分で判断できて、そういう人間の集団であることを理念としている社会なわけですね。この理念の無理さがあちこちでくると、やっぱり、自然に従う方がいいのではないかと。これ、エコの考え方にも通じますが、安易に流れるのは危険だと思っています。たしかに、人間の世界だけで力をつくると必ず悪がつきまとうという教訓から、科学では、人間の世界でないところから知識を持ってくるという無人化で、人間

を疎外してきた面があり、修正が必要と思います。しかし、皆さん、科学がない時代というのは、どんな時代だったでしょう。科学技術にすべての人がアクセスできない時代の労働、医療、衛生、教育、人権などを思い起こすことが大切です。最近よく、江戸時代はよかったとか、一面を切り取った話をしますが、全体で見れば、やっぱり不自由な、人間性の押さえられた世界だったわけです。だから、それをひっくり返す力として科学が憧れである時代があったのです。今、それが忘れられて、科学が過剰になったところだけが言われていますが、民主主義社会を束ねる力というのに科学が持つ推進力のことを忘れてはいけません。

以上で終わります。どうもありがとうございました。

「震災と経済：創造的復興に向けて」

甲南大学特別客員教授 藤田 昌久 氏

ただ今、御紹介にあずかりました、藤田でございます。先ほど、佐藤先生から、人間と科学、自然との関係につきまして、宇宙的な高見の視点から刺激的な講演をいただきました。私は、一転いたしまして、もっと泥くさいと言いますか、今流行りのドジョウの視点から、震災と経済について、私の考え方をお話させていただきたいと思っております。

3月11日の大震災により、北は青森の南から千葉県まで、約800kmにわたり、非常に大きな被害を受けました。私は、震災後、4月終わりから5月初めにかけて1週間ほど、それから10月半ばにも1週間ほどかけて、同じ被災地を視察しました。そのとき学びましたことも加えながら、震災について、どういうふうを考えるかについて、東北の皆さんへのエールを込めてお話をさせていただこうと思います。

今回の大震災は、歴史上始まって以来の巨大な複合災害だったと言えます。巨大な地震、津波、原発事故、電力供給障害、さらに私が経済学者として興味があります大規模なサプライチェーンの供給網の崩壊。日本は今から、本当に復興していくには大変だということでもあります。先ほど、原子力につきましては、佐藤先生からお話がありましたので、私は津波と、それから経済学者として興味があるサプライチェーンという問題に焦点を当てながら、復興のあり方について検討させていただこうと思っております。なお、確認したいことは、日本は既に、東日本大震災の前に、非常に多くの課題を抱えて大きく行き詰っていたということでもあります。従いまして、うまく元に戻しても、長期的には衰退する一方で、やはり、復興構想会議の理念にありますように、昔に戻すのではなく、将来につながる形で創造的な復興を目指そうということをお話をさせていただこうと思います。

さて、皆様ご存知のように、今回の震災で日本の製造業、特に自動車や電気機械などの組み立て型の製造業が半年近く甚大な被害を受けました。自動車産業を例といたしますと、自動車というのは、2万から3万の部品を組み立てたものであります。それぞれの部品は1カ所で集中的につくられて、日本中、それからアジア中、世界中に送られるという、ネットワーク型の構造になっております。いわゆるサプライチェーンと呼んでおりますが、非常に密なサプライチェーンになっているのが、自動車産業であります。電機産業も同じであります。このサプライチェーンに立脚して、ITを駆使しながら、ジャスト・イン・タイム方式で、在庫を極力減らして、効率的に生産されています。この効率重視の生産システムは、平常時には生産効率が非常に高いものであります。しかし、今回の東日本大震災、さらにバンコクの大洪水を経験いたしまして、この効率重視の生産システムは非常にリスクを伴っているということをお話させていただきます。我々は新しく認識したのであります。

自動車産業を見てみますと、車の製造拠点は、最初は横浜から名古屋までの東海ベルト地帯でありまして、それが80年代から九州に新しい生産拠点ができまして、90年代から東北中心に新しい製造拠点ができました。電機産業もほぼ同じであります。東北におけるそれぞれの部品工場は、特定の部品を作っておりますが、1,000ぐらいの重要な部品工場や素材工場が震災で操業を停止しました。これによりまして、東北の部品がなければ、名古屋や九州の自動車も生産できないし、バンコクやアメリカの生産もできないという形で、日本中、さらには世界中に大きな影響を及ぼしたのであります。

このように、歴史上初めて、大きなサプライチェーンの崩壊を経験したのであります。この経験を生かして、いかにリスクに強いサプライチェーンを再構築するかというのが現在の課題であります。ただし、リスクに強いということだけでなしに、大きく変わっている世界の新しい流れに対応したサプライチェーンを再構築することがこれからの重要な課題であります。特に、今までの日本の製造業は、欧米の先進国を最終市場としたサプライチェーンだったのですが、近年アジアが急速に成長しまして、アジアは全体として一つの生産拠点、さらには一つの市場になってきています。従いまして、リスク分散におきましても、アジア全体で協力して一緒にやろうというのが一つの大きな流れだと思っております。さらには、アジアのみでなく、世界中の新興国の成長を日本に取り込むようなサプライチェーンを再構築することが、今からの課題であります。

次に、大震災による津波の被災地の復興について考えたいと思います。ご存知のように、1935年の阪神大水害の時に甲南小中学校が非常に大きな被害を受けたのであります。このときに「常二備へヨ」という平生先生の理念を刻んだ石碑が建てられました。1995年の阪神大震災の後にも同じ石碑が、壊滅的な被害を受けた甲南大学にも建てられました。

問題は、この平生理念をいかに実現していくかということでもあります。津波に限定しまして、いかにして「常二備へ」る

か。基本的には三つの方策が考えられます。一つは、ハードを中心とした、いわゆる「万里の長城」方式。もう一つはソフト中心の「津波てんでんこ」方式。三つ目は、自然に逆らわないという、「宮古市姉吉町の方式」。これら三つの方式をうまく組み合わせるのが重要だと思います。万里の長城であります。砂漠から蒙古などが攻めてくると困るので、中国は延々と高い壁をつくったのです。これは公共事業としては非常に役に立ったかもしれませんが、気休めとしても役に立ったかもしれませんが、実際にはほとんど役に立たなかったと思います。というのは、例えば、嵐の晩の真っ暗なときに、どこか1点突破で簡単に乗り越えることができるわけです。従いまして、必ずしもハード中心だけでは、「常二備へヨ」にはならないということでもあります。

それに対しまして、「津波てんでんこ」方式。これは、大きな津波の被害を何度も被った三陸沿岸地域で言われてきたものであります。これは、ソフト重視型で、津波がきたときは、肉親とか友達の安否よりも、一人一人が自分の身の安全を確保して、てんでんばらばらに避難せよ。とにかく逃げろ。結果として、より多くの命が救われる。ソフト重視型の教えでありますけど、これも非常に重要なことでもあります。

もう一つの方式といたしまして、宮古市の姉吉町に、「ここより下に家を建てるな」という石碑が建っております。この石碑の教えを守ったおかげで、この町ではほとんど被災がなかったということでもあります。自然に逆らうなという教えであります。しかし、そうは言っても人口が増えますと、低地も使いたくなるわけで、結局はこの三つをいかにしてうまく組み合わせ、防災に強い町に復興していくかということだと思います。

最後に、先ほど佐藤先生がお話しされました、技術ないし科学と自然について少し考えてみたいと思います。技術・科学と自然を取り持つのは広い意味での（宗教を含めまして）文化だと思います。平生先生の「常二備へヨ」の碑文であります。常に備えて、悠久の自然とともに生きるには文化が重要な役割を果たすと思われまます。自然と共生という日本の伝統的な文化を表している建物として、ここでは伊勢神宮について考えてみたいと思います。水と森から成り立った日本の文化を伊勢神宮は象徴していると思われまます。ご存知のように、内宮と外宮も含めて、伊勢神宮の30ぐらいのあらゆる建物が、さらに、建物内部の刀から衣装から、あらゆる宝物も含めて、全く同じ物が、20年おきに、1200年の昔から（戦国時代、ちょっと中断しましたけど）作り直されてきております。これは式年遷都と呼ばれておりますが、なぜ20年おきに膨大な費用をかけて全く新しく作り直すのかということでもあります。いろいろな説があります。例えば、宮大工の技術継承のためにつくり直すという説もあります。しかし、有名な建築批評家の川添さんによりますと、技術継承の側面もあるかもしれないが、もっと根源的には、式年遷都は自然との共生という理念を凝縮している。西洋式では、神様は永久に生命が続くと考えられているかもしれませんが、日本の神様は、川添さんによりますと、自然と同じで、ジェネレーションごとに入れかわる。神様も亡くなって新しい世代が20年おきに生まれるのだと。その自然との共生という理念を、20年おきに我々が学んでいくための行事が式年遷都だと言われております。

大災害の教訓は、日々薄れて、忘れられがちです。従いまして、ジェネレーションごとにつないでいくためには、神社をつくるというわけでは決してありませんが、ある程度形式化した形で継承していくというのも、非常に重要なことだと思います。

「リスク・マネジメントを考える」

甲南大学特別客員教授 加護野 忠男 氏

今年の4月から賢人の仲間入りをしました加護野でございます。私はまだ、賢人になっての期間が短いので、できるだけ簡潔に、私が言いたいことの結論だけを簡単に述べていただきたいと思います。

神戸の震災と今回の震災とでは被害の範囲とスケールがずいぶん異なります。しかし、神戸の経験から学べることもたくさんあるのではないかと思います。

リスク・マネジメントに関しまして、お二人のお話にもあったように、二つの分野があります。一つは、災害が起こる前に、起こりうる災害の被害をできるだけ少なくするための手だてを打っておくという意味での、事前のリスク・マネジメントです。

もう一つは災害が起こった後、災害に対して実際に対応するという意味での、事後のリスク・マネジメントです。これには3つの段階があると思います。第1は緊急対応です。震災から3日間に必要となるものです。これは、危機対応であって、被害を軽減することが課題になります。そのとき鍵になるのは、現場の機転です。先ほど、防災の放送を最後まで続けたという実際のお話がありましたけど、彼女の機転で、彼女は命を失われてしまいましたけれども、実にたくさんの人々の命が救われた。この段階では現場の機転が非常に大きな力になります。

神戸の震災のときにもたくさんの事例がありました。その後の震災対応のヒントとして役だった例ですが、ニチイというスーパーマーケットの西宮の店長が、商品が床に落ちている状態を見て、道を通ってる人に、この床に落ちている商品は持って行っていただいて結構ですと言って、住民がありがたくちょうだいしたという例です。お店は、清掃のコストが随分節約

できたというメリットがありますし、棚にある商品で、売のために置いてある新しいものですから、備蓄品よりも新鮮です。この例から、備蓄をするより、店舗にある商品を被災者に配るのが効果的だということになりました。この機転から、有効な解決策を学ぶことができたのです。

第2段階は、第1段階が終わってその後3週間から3ヶ月の間です。この段階では、人々が昔の生活にきっちりと戻るようにしてあげることが課題となります。復旧には、あまり意味がないということをおっしゃる人もいますが、被害を受けた人々にとって、復旧が大切なのです。そのためには、適切な援助を行う必要があります。ここでは、公平性と効果のバランスが大切です。神戸の震災の経験からすると、お役所は物を配ったり、仕事をしたりする際に公平性の基準を重視せざるをえません。そのために、スピードが遅くなるという欠点があります。神戸市は、援助物資の配分を役所が行いましたが、西宮市は援助物資をボランティアに管理させました。ボランティアは、自分たちの判断で必要性が高いと思うところから配分していった。もちろん間違いもあったと思います。しかし、物資を役所が管理した神戸市では、物資の配分に時間がかかりました。すべての避難所にきっちり配分できるだけの物資が集まるのを待ってから配分したからです。

第3ステップは3週間から3ヶ月が経って、経済活動を復活させる、復興の段階です。この段階では、自助努力と将来ビジョンが重要になります。地域社会は、地域の経済活動にとって、さまざまな意味で重要です。地域の経済は企業とか産業にとってもものすごく大事なのです。地域の産業は地域社会に組み込まれているのです。産業の復興のためには地域社会を復旧させることが必要です。

昨年、広島で、白鳳堂という化粧筆会社の社長の講演を聞きました。彼の講演のなかで非常に印象に残っていることがあります。彼の会社は、広島の郊外の熊野という町にあり、もとは筆屋さんだったのですが、女性用の化粧筆をつかって、熊野の筆産業を立ち直らせた。熊野のような小さな町で仕事をしておりますと、住民がみんな、彼の公的、私的行動をすべて監視しているそうです。もし会社の仕事を怠けてベンツでも買おうものなら、地域の人々に糾弾されてしまうとのこと。だから、きっちり仕事をしない。非常にきついです。これが地方にいることの厳しさだとおっしゃっていました。地域社会は企業経営の監視すら行っているのです。

兵庫県の南西部に龍野という町があります。龍野は、今は合併して人口6万人ぐらいになりましたが、以前は4万人にも満たない小さな町でした。そんな小さな町であるにもかかわらず、全国で3割以上のシェアを持つ産業が3つあります。1つは、皆さんも御存じのそうめん「揖保乃糸」。もう1つは薄口しょうゆ。3つ目は「なめし革」の皮革産業です。この三つに共通しているのは、品質です。品質が高いということで、勝負をしている産業ですが、龍野のような小さな町で仕事をしていると、みんながお互いに監視しているため、品質に関して手を抜くことはできない。その地域社会によって監視されているという意味で地域社会と深く結びついています。

先ほど、西村さんがスイーツ学会の話がされましたが、神戸のスイーツ産業が強いのは、地域社会の人々の厳しい舌が産業を支えているからです。ケーキ屋さんに聞きますと、神戸のお客さんは厳しいそうです。砂糖をちょっと変えただけ、原料の産地をちょっと変えただけで、配合を変えたでしょうと言われてしまう。こんな厳しいお客さんと一緒に仕事をしていると、自然に腕が上がっていきます。これらは、産業が地域の人々によって支えられている典型的な例ですが、産業を発展させるためには、地域社会を上手に復旧させる必要があります。

将来のリスクを考え過ぎると、全く無味乾燥な町ができてしまう。それが地域社会を崩壊させてしまいます。単純な都市計画思想では産業は復興できないということをよく考える必要があります。

実は、神戸の震災の直後、復興を考える際の参考になりそうだとということで、山形県の酒田という町を視察に行きました。酒田は、大火がありました。町の中心部で大火があったために、火事になった地域をきっちり整備をして再開しました。きれいな建物が建っていますが、シャッター通りになっています。ほとんどの商店がシャッターを閉めたままという状況です。なぜそうなってしまったのか。それは、職住分離をしてしまったからです。ここは商業地域であって、住むのは郊外に住みなさいという職住分離をした。そのために、今まで商店街の人々がお互いに隣の店で買ったり、近くで買ったりするという、お互いの買い合いというのがなくなってしまった。そのために、商店街が寂びれてしまったのです。職住分離をした方が都市計画上はいいと思うのですが、それでは地域社会が崩壊して産業が復興できない。

神戸の場合にも、長田のケミカルシューズの産業が被害に遭いました。ここも職住分離が進められました。長田の場合は、それがいい方に出たという側面があります。長田は、職住混在の街でしたが、職住分離が進められたために、低コストで生産をするという、震災以前の方式が成り立たなくなった。そのために、高級品をつくるという方向へ産業全体がシフトして行かざるを得なかった。そのために、時代の流れにうまく乗り換えることができました。産業は元へ戻すだけでは生きていけないのです。そのためには産業を支える地域社会をうまく復旧させることが必要なのです。

これからの復興を考えていくときには、多様な知識を総合していくことが必要だと思います。そのためには、お二人の先生の見識をできるだけ活用して、マネジメントをしていくべきだと思います。

「日本発・公共の善をひろめよう」

甲南大学長 高阪 薫 氏

甲南大学学長、高阪でございます。私は、日本文学・民俗学・思想史等を専門にしております。このたびの大震災に關しまして、文学は一体、どういう役割をするのか。何が出来、何をやればいいのかという点で、参加者の先生方のお話を聞いていて非常にむなしい気持ちであります。文学というのは、こんな未曾有な震災で文明的価値観がひっくり返るような時に役に立つのか、特に、芸術関係とか、文学とか、そういう側面での震災への協力、復旧、復興なんていう問題は論じられないのではないか。

しかし、私も先ほどの話ではないですが、三位一体での協力、自然、社会、人文科学の三つが一体となった支援、復興というのは、あり得るであろうというお言葉をいただきましたので、それに託けてちょっと作家の話を出してみたいと思います。

私は島崎藤村の研究をしまして、その学会の会長をやっているのですが、それで、ちょっと本をひもといいてみて、気付いたのですが、島崎藤村は、関東大震災時に生存中です。大正13年、そのとき東京の飯倉片町に住んでいました。それで、全集を調べてみたら、やっぱりちゃんと記録・エッセーを残しているのです。そうか、文学というのは、記録に残すことで、後世に伝えるという大きな役割があるのだなと思いました。1923年の関東大震災、これは実に、死者・行方不明10万5,000人、主に火災です。確かに東北の地震も大きいですが、大津波などで行方不明者を含めて約2万数千人、それから阪神大震災は建物倒壊が主で7,000人に近かったですか。関東大震災というのは、これはもう比じゃないです。地域全域が火災にやられて、有名人や文人やいろいろな芸術家が、被災者で移住を強いられました。文人の中では、ここ阪神間、東灘に長く住んだ谷崎潤一郎なんかそうですが。

島崎藤村は、その地震、火災、暴動の恐怖の災禍をつづった『子に送る手紙』というのがあります。この子供というのは信州に住んでいた。その子供に送る手紙ですが、この1節を読んでみますと、

「この異常な場合に際会して、私は実際に目撃したこの近所の人達の心のあらはれ」を記しています。「私達の近所附合といふものも平素はごく冷淡で、…自分のすぐ隣に居る人が竹澤さんの主人とも知らなかつた。…南隣の杉山さんの全家族を見たのも、それが初めての時といつていゝ。…地震で負傷した娘が手足を包帯にしたまゝ、あふむきに寝かされて居る。…可愛い赤ん坊に乳を吸はせて居る年若な母親もある。平素はめつたに口をきいたことも無いものが、そこでは言葉をかはし、握飯を分けて食ひ、また揺り返しが来たと言ふ度に互ひに顔を見合せて同じ胸の鼓動を覚えた」と記しています。そして「唯の一度もこんな光景が今迄に見渡されたらうか。こんなところに隣人を見つけた、それを思ふとうれしかつた」と記します。

この光景は、阪神大震災にもありました。東北の被災地にもありました。藤村も関東大震災の危急場面で、日本人の暖かい助け合う隣人愛を見逃さずに書いているわけです。こういった日本人の思いやりの心情は、実は、今度の東北の地震にもありましたけれども、外国人の記者が、これを世界に伝えて、世界中に感動を与えました。藤村ももちろん、困ったときの助け合いの光景に隣人愛を見て、子供たちに手紙を書いたのでしょう。外国人の記者も、阪神の東北の日本人の姿を見事に活写して、それを世界に発信しています。

私は、この被災地の日本人の被害を受けて、パニックに陥っても、乱れることなく、助け合って、粛々と行動し、実際に、けんかや暴動、反乱もなかったのですが、そういう窮状での生活をしている姿、これを、あの関東も阪神も東北も、当時も今も、日本ではそうすけれども、報じられ、記録され、外国人が、こういった日本人の熱い思いやりと、冷静な行動、そういった絆と互助を世界に伝え、感動を与えております。

なぜ、日本人がこういう行動をとれるのか。外国人がよく言うことに、日本人は、外国での評判は、黙って黙々と働き、まじめで勤勉だ、団円で協力しあう。これは、トータルな評価になっております。この行為が、実は、とっさに震災時にあらわれたと。何も地震の折ばかりじゃなくて、これは、海外に出向いたときの企業活動。あるいは、皆さん方が観光旅行に行かれても、真面目、勤勉、団円行動の姿は、外国人に好意的に見られている。日本人の一つの民族性とでも言っていきたいと思います。

このことをどう捉えるか。歴史的な観点から考えたいと思います。まずどうもこの性格・気質が、伝統的に日本人のDNAというようなものに繋がっているのではないかと。もともと日本人は定着した農耕民族として、90%以上、お百姓さんだった。そういう稲作の農耕生活に原因があったのではないかと。

いろいろ例が挙げられると思うのですが、私は本学で環境実践の問題を扱ってしまして、田植えの体験を学生にさせて、私も参加するのですが、未経験の学生が多く、大概その重労働に1時間も立たずに音を上げます。その田植えは、協働で働きお互いの協力なくして出来ないのです。

さて平地の、平野部の田植えや、山間の棚田の田植えといろいろありますが、棚田の例を挙げますと、日本の棚田百選、美しい段々畑の棚田の光景というのは、今でもいろいろな写真集が出ています。その棚田の一番大きな役目は、米の収穫を上げるのはもちろんですが、水をためるダム機能が非常にすぐれ、これは日本中にある田んぼを全部合わせた3倍もの水

を蓄えているという点です。全国で約22万㎡あって、貯水できる水量は6.6億トンだそうです。これは、利根川系の水系にある11個のダムが貯水できる量の約3倍で、それほど棚田の機能が、洪水や鉄砲水が出ないように、下流地域を守るということです。そういうところで代々、辛抱強く水をくみ上げて、田植えのために延々と維持して、千数百年来、稲作農業をやっている。この繰り返す生活の意味は、どういうふうに日本人の民族性に形成されるのであろうか。辛抱強く、力強く、助け合って、まじめに働く。こういう性質が協力と真面目と勤勉となります。

そして我慢し続ける。いろんな季節の天災がありますが、暴風雨とか旱魃とかそういうところで一生懸命努力する。それから狭い土地から高い収益を上げるための工夫。それと技術。そのために能率的に計算された田植えの植え方。田植え歌を唄い、田植え綱というのが、昔からあって、きちっと正確に植えていくという、こういった儀式と美意識と精緻さ、あるいは、季節を読んで準備する先見性と周到さ。これらが長い間、日本人の国民的特性を形成しているのではないかと思います。辛抱強く、まじめに働く、協働、勤勉、誠意と努力。これらが、近代の科学技術立国への潜在的な能力、ポテンシャルがあったということを十分に伺わせるものであります。これが日本人の精神の根底となっているのではないのでしょうか。

私はかつてフランスに行ったときに、1990年頃でしたか、フランス人が、アリとキリギリスの話を持ち出してきて、日本人はアリビトと言っていました。あるいは他国で働きバチと言われた。それがちょうど、高度成長期の日本人というイメージでありました。ところが最近、バブルが崩壊し、リーマンショックを経て、日本の不毛の20年と言われ日本の経済・政治的地位の世界的低下によって、アジアの人からも、あの働き者のアリ、あるいはハチであった日本はどうなっているのかと言われてます。中国、韓国から追い抜かれてどうなるのかという問題です。そこには無口に、辛抱強く、まじめに協力して働く姿が見られないと、日本人の薄れた存在が指摘されます。去年、台湾の東海大学に呼ばれて講演したとき、たまたま現状の日本の政治経済に触れて、元気がない状況をお話ししました。そうすると、質問者が、「日本は、かつてのように元気でいてほしい」。その後、「帝国主義にならないのですか」。こう言われて、ちょっとびっくりしたことがあります。ちょっとおっかない質問でしたが、あの好日で紳士的な台湾はこのたびの震災では、100億円の義援金を日本に寄付していただきました。これは世界で一番多額でした。その台湾の人が心配してくれて、まさか帝国主義になってトップになれと言われると、そんな意味で日本の行く末を心配してくれては困りますが、でも日本にもう一度、アジアにおける正当なリーダーのあり方を志向するというのを突きつけてくれた問題でありました。そこには日本人の勤勉・誠実・真面目・協力の姿を見ていた台湾人の想いが込められていると思われまます。

このほかアジアにはいろいろありますが、結局は私がここで話したいことは、やっぱり日本人は、民族性、真面目で勤勉で互助精神に富むということが、世界で共通認識のレッテルを得ているようです。この日本人の、美徳の根底にあるものは、今まで自然を大事にし、自然と共生してきた、そこで狭いながらも日本人が一生懸命まじめに働いてきたというのが、伝統的に我々の血の中に流れているのだと思います。

それともう一つ、日本はいわゆる八百万の神、自然界全部がこの神々に満ちている。このアニミズムの世界観の中で生きている国民性であると。自然から、離れられない農耕生活様式を、現状生活から離れて生きていくことはない。そして、自然から学び、自然とともに生きていくという。こういう中に私たちが自然と共存共生という考え、方法が身につけているのです。

一方で、仏教的には慈悲の精神、無常観とか、無きに如かざる精神みたいな清貧なモラルが横たわっていて、日本人の精神の根底を形成しているのです。こんなものが私たちの生きていく価値の根底に据えられているのではないかと思います。

日本人の勤勉・我慢・誠実・協働・努力等、これらは、私はグローバルな、公共の善として、世界に広めていくべきであろうというふうに思っております。人間的・倫理的モラルであります。これらは、国を超えて生きる方法、方針として、グローバルな、新しい公共の善として、隣人愛の絆として、共有したいものです。かつて「もったいない」精神が世界に広まったように、人的交流、親善に、日本人のこの真面目な、勤勉な誠実な公共の善を、世界に広げていくということは可能ではないかなというふうに思ったりしております。

 **甲南大学**
ビジネス・イノベーション研究所

〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本8-9-1
TEL.078-435-2754 FAX.078-435-2324
E-mail:bi@center.konan-u.ac.jp
<http://bi.bus.konan-u.ac.jp>